

英語語法文法学会 第21回大会資料

日 時： 2013年10月19日（土）

開催地： 九州大学大学院言語文化研究院
（伊都キャンパス）

住所：〒819-0395 福岡市西区元岡744番地
<http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/info/index.html>

英語語法文法学会

The Society of English Grammar & Usage

September 2013

英語語法文法学会第21回大会プログラム

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,500 円 学生 2,000 円(予稿集代を含む)

日 時：2013 年 10 月 19 日(土) <昼食は学内の食堂をご利用ください>
開催地：九州大学大学院言語文化研究院 (伊都キャンパス)

住所：〒819-0395 福岡市西区元岡744番地

<http://suisin.jimu.kyushu-u.ac.jp/info/index.html>

- 順路 ●福岡空港から・福岡空港一地下鉄空港線35分—九大学研都市駅—昭和バス15分—
九大ビッグオレンジ前
- 博多駅から ・博多駅—地下鉄空港線30分—九大学研都市駅—昭和バス15分—
九大ビッグオレンジ前
- ・博多駅Aバス停—西鉄バス60分—九大ビッグオレンジ前
- 天神から ・天神駅—地下鉄空港線25分—九大学研都市駅—昭和バス15分—
九大ビッグオレンジ前
- ・天神ソラリアステージ前2Bバス停—西鉄バス50分—九大ビッグ
オレンジ前

開催校委員：松村瑞子 開催校協力教員：江口 巧・大津隆広

- ワークショップ(センター1号館 1303) ●研究発表(センター1号館 1302・1303)
●総会(センター2号館 2306) ●シンポジウム(センター2号館 2306) ●一般休
憩室・書籍展示(センター1号館 1304) ●司会者・関係者(ワークショップ・研
究発表・シンポジウム発表者)控え室(センター1号館 1306) ●大会本部・運営委
員会室(センター1号館 1305)

受付：10時00分より センター1号館 3階 ホール

ワークショップ(センター1号館 1303) 10.30 – 11.55

司会 中山 仁(福島県立医科大学)

1. 「連鎖動詞 *come to* と *get to* に後続する動詞とアスペクト」
藏菌和也(関西学院大学大学院)
2. 「Way 構文に伴う「困難性」—*manage to* テストの提案—」
中村英江(神戸女子大学大学院)
3. 「接触・衝突の *against* と *into* について」
西前 明(明治学院大学非常勤)
4. 「客観的所属と主観的所属 —*belong to* と *belong in* の場合—」
金子輝美(愛知淑徳大学非常勤)
5. 「学習英文法における場所句倒置構文について」
大川裕也(札幌大学)

受付：12時30分より センター1号館 3階 ホール

研究発表 13.00 - 14.45

第1室（センター1号館 1302）

- 司会 松尾文子（梅光学院大学）
1. 13.00 - 13.35 「「The 比較級, the better.」の意味と語用論的機能」
小林 翠（大阪大学大学院）
 2. 13.35 - 14.10 「認識的法助動詞の疑問化」小澤賢司（日本大学大学院）
 3. 14.10 - 14.45 「カテゴリーの視点から「クジラの公式」を読み解く」
明日誠一（青山学院大学非常勤）

第2室（センター1号館 1303）

- 司会 伊藤 晃（北九州市立大学）
1. 13.00 - 13.35 「「遠ざかる」義に関わる前置詞 down の語法
—副詞 down との差異に注目して—」
濱上桂菜（大阪大学大学院）
 2. 13.35 - 14.10 「恐怖を表す感情語と構文との共起性
—使役移動構文と二重目的語構文の用法を中心に—」
中尾朋子（大阪大学大学院）
 3. 14.10 - 14.45 「穴あけ構文と「結果目的語」」
五十嵐海理（龍谷大学）・吉川裕介（佛教大学非常勤）

総会（センター2号館 2306）15.00 - 15.20

開会の辞	会長	内田聖二（奈良大学）
開催校代表挨拶		徳見道夫（九州大学大学院言語文化研究院長）
学会賞選考報告	会長	内田聖二（奈良大学）
事務局報告	事務局長	須賀あゆみ（奈良女子大学）

シンポジウム（センター2号館 2306）15.35 - 17.45

テーマ 「名詞句とその修飾をめぐって」

- 司会 中澤和夫（青山学院大学）
1. 「名詞の限定修飾について」 中澤和夫（青山学院大学）
 2. 「最上級名詞句とその修飾をめぐって」 河野継代（東京学芸大学）
 3. 「名詞の前位修飾について」 佐々木一隆（宇都宮大学）

閉会の辞 松村瑞子（九州大学）

懇親会 18.00 - 19.30 会場：天天（TEN TEN）（稲盛財団記念館1階）
（懇親会費：一般 5,000円 学生 3,000円）

ワークショップ（センター1号館 1303） 10.30 – 11.50

司会 中山 仁（福島県立医科大学）

連鎖動詞 *come to* と *get to* に後続する動詞とアスペクト

藏菌和也（関西学院大学大学院）

(1a, b)にみられる起動のアスペクトを表す連鎖動詞 *come to* と *get to* の補文選択の問題について論じる。

(1) a. Then again, like so many others who have come to do business with the NFL over the years, (COCA)

b. Deaf people will think the film's over and take a hike before I get to do my roof-top ending. (BNC)

小西(編)(1980; 2006)、江川(1991: 216)などで *come to* は一般的に思考・感情・感覚を表す状態動詞をとるとされ、*get to* は Wood (1965:103)や小西(編)(1980; 2006)などで一般的に永続的な状態を表す動詞をとるとされる。しかし実際は(1a, b)のようにその説明に反した動詞をとり、*come to/ get to* がどのような性質の動詞を従えるのかの説明が不十分である。本研究の目的は柏野(1999; 2012)の動詞の分類法に基づいて *come to/ get to* に後続する動詞を意味的に分類し、*come to/ get to* がどのような意味の動詞を従えるのか、またなぜその意味の動詞を従えるのかを意味的・統語的な観点から明らかにすることである。

Way 構文に伴う「困難性」—manage to テストの提案—

中村英江（神戸女子大学大学院）

本発表は、Way 構文の多義構造に関わる「困難性」(Goldberg 1995)の有無を特定するために、manage to 句をテストとして利用することの有効性を議論する。この「manage to テスト」は、Way 構文のある事例で得られる意味と、同じ事例に manage to を付加した場合に得られる意味とを比較する手続きのことである。Way 構文を、Goldberg(1995)は意味的解釈により「手段」「様態」の二タイプに分類し、影山・由本(1997)は動詞の意味構造に基づき「通路の作成」「移動の様態」「移動の随伴動作」の三タイプに分類する。問題は、Goldberg(1995)の「様態」と影山・由本(1997)の「移動の様態」、「移動の随伴動作」との対応関係であるが、この点は本発表が提案する「manage to テスト」により明らかになる。すなわち、(i) Goldberg(1995)の「様態」は、「移動の随伴動作」と「移動の様態」の下位類が認められること、さらに(ii) Goldberg(1995)の「困難性」の概念を援用することで、「移動の随伴動作」は「困難性」が加わると「手段」解釈が強制されるため、「移動の様態」とは明らかに区別されるタイプであることが確認できるのである。

接触・衝突の against と into について

西前 明 (明治学院大学非常勤)

接触・衝突を表す前置詞 against と into について、インフォーマント及びコーパスから得た用例を基に、主に以下のことを述べる：(1.1) 接触の into の意味は、「動く物体がなるべく正面から接触する」である (I kicked/*put the ball into the goalpost./The car scraped against/*into the guardrail.)；(1.2) into が接触の意味になるか、「中に入る」の意味になるかは、into の目的語だけでなく動詞の選択にもよる (The kite crashed/*fell into the ground./The kite fell into the river.)；(2.1) 接触の against の意味は、「物体を止められるだけの“力・大きさ”を持った壁 (= 垂直面) を押す」である (Put your umbrella against the wall/*the floor./The bird smashed against the window./*The vase dropped against the floor./I threw my suitcase against the wall/??the alarm clock.)；(2.2) Put your umbrella against the wall. (= ... on the wall.) のような例における、against による壁および床 (= 水平面) との二点接触 (および、接触の持続) は、壁を押すのが静止した物体である場合の物理的必然である；(2.3) The table was against the wall. のような例は、寄りかかって壁を押す角度が限りなくゼロに近づいたケースと考える；(2.4) 打撃・圧迫を表す動詞とは、床との接触でも against が使われることがあるが、on の方が好まれる (I banged my head on/against the floor./Put your umbrella on/*against the floor.)。

客観的所属と主観的所属 —belong to と belong in の場合—

金子輝美 (愛知淑徳大学非常勤)

OED²によるbelongの語義説明を私流に解釈すれば、「属している／本来あるべきところにある」という相互に関連する2つの意味が渾然一体となって、主語の「状態」を表していると言える。(1)はbelongの原初的用法であり、その原義を文中で感じ取ることができる。このbelongにtoやinなどを伴う語句が加えられると、所属先が明示される。(2)ではtoとinが対比的に使い分けられている。事態の捉え方の違いによるものであると説明できるが、この場合、著者の意図や思惑をどのように推測すればいいのだろうか。

(1) All her life, Jane Jeong Trenka struggled to belong. Born in South Korea, she and her sister were [...]. (*International Herald Tribune*, June 29-30, 2013)

(2) [...], the question of whether nominalization belongs to the syntax or in the lexicon does not even arise in cognitive grammar. (Langacker 1991:23)

「XはYに属する」という客観的所属関係は、見方を変えれば、「XはYの中にある」ということであり、「X in Y」という好意的イメージで主観的に捉えられることが多い。to の用例は単に所属の方向性を示すが、in, at, among, with, on, under などと伴うと、それぞれの前置詞独自の意味を介して、主語が所属先とどのように関わって「存在」するのかに焦点が移される。

学習英文法における場所句倒置構文について

大川裕也（札幌大学）

本発表では、学習英文法における場所句倒置構文の記述を見直し、場所句倒置構文の機能的特徴を考察する。場所句倒置構文は以下の例が示すように、場所句が文頭に置かれ、主語と動詞が倒置した文である。

(1) On the dining table is a vase of glass with roses.

(2) Just inland from this, against its background of sheltering trees, stood the house.

学習英文法では、「場所句が強調のために文頭に置かれると倒置が起きる」という前提に加え、上記の文は「英語では長い主語を避ける」という傾向に従った文であると説くものが散見される。この説明は(1)のような文には適用されるが、(2)の *the house* のような「長くない主語」が場所句倒置構文に現れる事例には当てはまらない。さらに、学習英文法では単文レベルの文法を教示する傾向があるが、このような方法では場所句倒置構文の談話的効果が適切に教示されない。本発表では、場所句倒置構文におけるこれまでの意味的・談話的分析では提示されなかった機能的特徴に着眼し、学習英文法における場所句倒置構文の適切な記述と教示法を再考する。

司会 松尾文子 (梅光学院大学)

「The 比較級, the better.」の意味と語用論的機能

小林 翠 (大阪大学大学院)

「The 比較級..., the 比較級~.」構文において、後件の比較級に better が生起しそれに主語や述語等が後続する場合、better の示す度合いは様々である。例えば (1) は、前件に比例した「ホテルの接客の質の高さ」の度合いの増加を表している。一方、後件が the better のみからなる (2) のような構文は、前件 (練習開始までの時間の長さの度合い) に比例して、常に「話し手の抱く望ましさ」の度合いが増加することを表す。

(1) The more expensive the hotel, the better the service. (Murphy 2004: 212)

(2) The sooner you start practicing, the better.

本発表では、(2) のような、意味的形式的に固有の特性を持つ「The 比較級..., the better.」を考察対象とする。そして、辞書記述を基に、その基本的意味を「話し手の抱く望ましさ・好ましさ」と仮定し、字義通りの意味に加えどのような語用論的機能が生じるのかを、小説や映画の台詞などの実例を通して実証的に考察する。具体的には、当該構文は「話し手の抱く望ましさ・好ましさ」といった字義通りの意味に留まらず、「依頼・要求」や「助言・忠告」といった語用論的機能を持つことを明らかにする。また、そのような語用論的機能が生じる要因について認知言語学の観点から論じる。

認識的法助動詞の疑問化

小澤賢司 (日本大学大学院)

認識的法助動詞の疑問化には、以下に見るような言語事実がある。

(1) *Can* they be on holiday? (Leech 2004: 92)

(2) a. {*Might*/**May*} you go camping? (Swan 2005: 316)

b. *May* we *not* be making a big mistake? (Swan 1995: 324)

(3) a. *Must* there be some good reason for the delay?

(Quirk et al. 1985: 131, note c)

b. **Must* he be at home now? (荒木他 1977: 377)

*Can*の疑問化には問題はない。*Might*は疑問文で用いられるが、*may*は用いられない。しかし、不思議なことに、否定疑問文では、*may*は容認可能となる。さらに、*must*の容認性に (一見すると) ズレが見られる。本発表では、上記

のような認識的法助動詞の疑問化に関して、主観・客観の立場、ならびに、疑問文の種類とその機能から考察を試みる。

カテゴリーの視点から「クジラの公式」を読み解く

明日誠一（青山学院大学非常勤）

(1)は「クジラの公式」の名称の由来ともなっている英文である。英語学習者の頭を悩ませるこの英文の「分かりにくさ」をカテゴリーの視点から解き明かすことが発表の目的である。

(1) A whale is no more a fish than a horse is.

学習者が抱く疑問は、①「魚と言えるかどうか」はカテゴリーの問題で、カテゴリーには程度が存在しないのではないか?、②「クジラは魚ではない」と言うのに馬を引き合いに出すのはなぜか(実は、これもカテゴリーと関係する)?、の2点に集約できる。この2つの問題を、通時的な側面と共時的な側面に分けて論じる。前者については、歴史的な背景として、1818年にニューヨーク市の市長裁判所で、クジラが魚かどうか争われた事件を取り上げる。後者については、日本語の影響—カテゴリーよりも、主題関係の視点からグループ化する傾向が強いこと—と、英語の特性—a fish が段階性を表し、「魚らしさ」は一次的特性(胎生や肺呼吸など)と二次的特性(外見が魚と同じ、水中に生息するなど)の2つに区分できること—を取り上げる。

馬は「魚らしさ」の二次的特性を持たないので、(1)でクジラと馬の類似性を話題にする場合、カテゴリー的には、一次的特性が問題になる。

第2室 (センター1号館 1303)

司会 伊藤 晃 (北九州市立大学)

「遠ざかる」義に関わる前置詞 down の語法 —副詞 down との差異に注目して—

濱上桂菜 (大阪大学大学院)

本発表では、移動動詞と共起し「遠ざかる」ことを含意する前置詞 down を取扱い、副詞 down と対照する。これらにおいては、「直線かつ水平の移動」に関わる点で共通している。しかし前置詞 down は、(1) のように到着点を明示する必要がなく、また文脈上到着点が明らかでなくとも使用が可能である。その一方で副詞 down は、「遠ざかる」ことを含意するためには、到着点を明示する必要があり (例 (2))、到達点が文脈上明らかである場合を除いては単独で「遠ざかる」ことを含意することはできない (例 (3))。

- (1) Mary walked **down** the street.
- (2) Mary walked **down** to the station.
- (3) *Mary walked **down**.

そこで本発表では、前置詞 down の語法を明らかにするために、まず前置詞・副詞の down における「遠ざかる」義が話し手の認知的な「移動物の縮小」により動機づけられているという考えを示す。その上で、前置詞の用例を分析し、前置詞と副詞の間に違いが生じる理由を明らかにする。本発表が提案するように認知主体の存在を認め down の使用動機を考慮すると、前置詞用法と副詞用法の共通点や相違点を統一的に説明することができる。

恐怖を表す感情語と構文との共起性 —使役移動構文と二重目的語構文の用法を中心に—

中尾朋子 (大阪大学大学院)

英語の「使役移動構文 (Caused-Motion Construction)」と「二重目的語構文 (Ditransitive Construction)」には、感情や心理的变化を表す慣用的な用法がある。これらは、感情が物体として、人が感情の受け手 (経験者) として捉えられる。この二つの構文の元来の特徴である物理的な物の位置変化・移送という意味がメタファー的に拡張されて使用される。注目すべきことは、このような使役移動構文と二重目的語構文では、恐怖を表す感情語類との共起に違いが見られることである。つまり、使役移動構文の場合では **fear, terror** が生起し (e.g. The scene struck {fear / terror} into him.), 二重目的語構文では **fright, scare** が生起している (e.g. The scene gave me {a fright / a scare}.) ことが確認で

きる。

本発表では、二つの構文パターンに見られる、恐怖を表す感情語の種類との共起の違いに着目して、BNCのデータを提示し、その感情語の意味的な特徴と構文の用法との関連性を探る。これらの分析より、感情語が表す「時間的」な解釈が役割を果たしており、感情語と構文全体との意味的な一致が共起に関わることを示唆する。

穴あけ構文と「結果目的語」

五十嵐海理（龍谷大学）

吉川裕介（佛教大学非常勤）

本発表は(1)のような穴あけ構文(a hole construction)と、それに類似した動詞句を並行的に観察することにより、動詞と目的語の相互依存関係を論じる。(1)は、タバコで焼いて布地に穴をあけてしまうことを意味し、動詞+a hole+前置詞句の組み合わせで生起している。タバコで焼くことで穴があくという結果にいたるという意味で、a holeは「結果目的語」と呼ばれる。

(1) Stephanie burned a hole in her coat (with a cigarette).

(Levin and Rapoport 1988)

穴あけ構文を含む結果目的語を伴う動詞句の研究は(しばしば way 構文と並列的に)動詞の意味に基づく生起関係を観察するものが多い(e.g. 野中 2011)。本発表では、それらの研究とは少し異なる着眼点から、次の3点を主張する。

(i) 結果目的語は動詞の意味によって一方的に選択されるのではなく、相互的に意味が融合しており、特定の名詞は一定の動詞との組み合わせで結果目的語の解釈を持つ(他の動詞とでは結果目的語の解釈を持たない); (ii) 従って、こうした目的語に現れる名詞は二義的である; (iii) 結果目的語として生起する名詞について、その原因となりうる動作を表す動詞を含む属性的な分析が可能である。

テーマ 「名詞句とその修飾をめぐって」

司会 中澤和夫（青山学院大学）

名詞句の中の主要部名詞を修飾するのは、典型的には形容詞であるといえるが、実は他にもさまざまな統語的構造体が名詞を修飾することができる。それらは一体どのような構造をもつものであろうか。また、単に「名詞を修飾する」というが、意味論的にはどのようなタイプの修飾がありうるのであろうか。換言すると、名詞は統語的・意味的にどのような要素によって修飾され、どのような統語的・意味的特徴を持つようになるのであろうか。本シンポジウムでは、各講師がいくつかの事例を取りあげ、その分析の方向性を提案する。

名詞の限定修飾について

中澤和夫（青山学院大学）

本発表は、ある要素が名詞を前位修飾するとき、その要素と名詞との間にはどのような特徴がみられるのかを考察する。便宜的に、前位修飾を限定修飾と呼ぶならば、名詞を限定修飾するとは意味的・統語的・あるいは音韻的にどういうことなのであろうか。様々な要因が複雑に絡み合っていることは容易に想像できるが、ある要因は他の要因と有機的に関係しているということはある。例えば、*industrious Japanese* といえ、それは通例多義であって、それぞれの意味が一定の統語構造と密接な関係を持っている。また、いわゆる転移修飾という現象があるが、これも統語的・意味的に複雑である。あるいは、興味深い例として *Salvation Army* と *Montana Cowboy* がある。ここでは *Salvation* や *Montana* が、それぞれ後続の *Army* や *Cowboy* を限定修飾しているとみえる。しかし、両者には、音韻的・意味論的に、決定的な違いがある。前者の強勢型は *Sálvàtion Ármy* というリズム規則がかかった形が可能であるのに対して、後者はそうならず **Móntàna Cówbòy* という強勢型は不可であり、*Mòntàna Cówbòy* しかない。この違いはなぜなのか。

本発表は、様々な限定修飾の事例をできるだけ分類し、それぞれの特徴を考察したい。

最上級名詞句とその修飾をめぐる

河野継代（東京学芸大学）

最上級名詞句を修飾する言語表現には形容詞、前置詞句、不定詞等いろいろとありえるが、その中に関係節がある。最上級と共起する関係節にはいくつかの分析可能性があるが、そのひとつに Quirk et al.(1985)のように通常の制限的關係節とみなす考え方がある。

本発表では、この制限的關係節とする分析が妥当であるのか否かを検討し、最上級と共起する関係節には純粋な制限的關係節とは異なる特徴を持つ関係節があることを指摘したうえで、その関係節の分析の可能性を検討することにする。

具体的には、最上級の関係節は先行詞、関係詞、内部構造、分布といったあらゆる統語的特徴において通常の制限的關係節とは異なることを示した上で、これら諸特徴は最上級の関係節が最上級の要求する範囲の指定をする関係節であると考えればすべて説明できるということを、なるべく多くの具体例を挙げながら論証する。

名詞の前位修飾について

佐々木一隆（宇都宮大学）

英語において名詞は形容詞などに前位修飾されることもあれば、関係節などに後位修飾されることもあるが、日本語や中国語の名詞では前位修飾しか許されない。こうした比較の視点に立つと、英語における名詞の前位修飾は統語的・意味的にどのように捉えられるのであろうか。そして、例えば **a stroke and resulting partial loss of language** において下線部のように名詞前位修飾語が連なって生じるような場合、当該修飾語の出現にディスコースがどのように関わっているのであろうか。さらに、**the rapidly expanding role of English in the contemporary world** のような例では、下線部が単に名詞 **role** を前位修飾しているというより「述部」の機能を果たしており、名詞句全体は「現代世界において英語の役割が急速に広がっていること」というように解釈できる。これは通常の名詞前位修飾から外れる場合があることを意味しており、こうした周辺の存在は一体どのように説明されるのであろうか。

本発表では、日中語との違いに触れたうえで、英語における名詞前位修飾の統語的・意味的特徴について、ディスコースの視点も加味しながら、通常から周辺へという順に考察していく。

英語語法文法学会役員

名誉顧問	児玉徳美	八木克正		
会長	内田聖二			
事務局長	須賀あゆみ			
会計	大竹芳夫			
会計監査委員	中山 仁			
運営委員	内田聖二	大竹芳夫	大室剛志	神崎高明
	吉良文孝	澤田治美	須賀あゆみ	菅山謙正
	関 茂樹	中澤和夫	中山 仁	林龍次郎
	松村瑞子	安井 泉		
編集委員	菅山謙正 (編集委員長)			
	牛江一裕	大竹芳夫	大室剛志	神崎高明
	吉良文孝	関 茂樹	中澤和夫	中山 仁
	西田光一	林龍次郎	松村瑞子	安井 泉
	吉田幸治			

発行日 2013年9月5日

編集・発行 英語語法文法学会
代表者 内田 聖二
事務局 〒630-8506 奈良市北魚屋西町
奈良女子大学文学部言語文化学科須賀研究室内
TEL & FAX: (0742) 20-3288
E-mail: segu.office@gmail.com
URL: <http://segu.sakura.ne.jp>
振替口座 02260-0-70393 英語語法文法学会
© 英語語法文法学会
